永遠の命のパン
であるイエス・キリスト

ヨハネ6章41~51節
2021年1月31日
松田 基子 師

イエス様は何故神の子の位を捨てて、人の世に生まれて来られなければならなかったのでしょうか。 ヨハネ福音書3章 16 節には、

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。 独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」

と記されています。 聖書が言う、永遠の命とは、私たちの生も死も、その存在の全てが、神様の愛に守られるという事を言っています。

イエス様は30歳の頃、その使命を帯びて、この福音を宣べ伝える宣教に立ち上がられました。イエス様の願いはＩテモテ2章4節に記されています、

「神は全ての人々が救われて、真理を知るようになることを望んでおられます。」

という、この神様の願いを実現させるところにありました。 イエス様はヨハネ6章で、弟子たちと共に、伝道の拠点であったガリラヤのカファルナウムから、ガリラヤ湖を渡って対岸にある、小高い山に上られました。 そこへも、大勢の群衆がイエス様を求めて集まって来ました。

その数は男性だけでも五千人を数えました。イエス様は大麦のパン五つと、魚2匹をもって、奇跡を起こし、彼らに食事を与えられました。6章14節を見ますと、

「そこで、人々はイエスのなさったしるしを見て、まさにこの人こそ、世に来られる預言者である。」

つまり、モーセが申命記18章18節で預言した、

「モーセのような預言者である」

と言ったのです。

群衆のイエス様に対する人間的な期待は、一気に高まりました。 当時のイスラエルは、ローマの属国として、税に苦しみ、殆どの人が貧しい生活を強いられていました。 それは、何時もお腹を空かせていたという事です。

イエス様はその彼らを憐れんで、先ず、肉体の欠乏を満たす、給食の奇跡を行われたのでした。 それは、彼らに対して、御自身が、どの様な存在であるかを知らせる徴(しるし)でした。 しかし、人間の側は、生来自己中心で、自分たちの欲求が満たされることにしか関心がありません。パンの奇跡を起こすことが出来る存在こそ、自分達が最も必要としている存在です。 民衆にとっては、王に相応しく、救い主メシアとなるべき存在です。

パンの奇跡の翌日、群衆はイエス様を探して、カファルナウムへやって来ました。 彼らが、イエス様を見つけて、挨拶をすると、イエス様は6章26節で、

「はっきり言って置く。 あなた方が私を捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ。 朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。 父である神が、人の子を認証されたからである。」

詳訳聖書では、

「権威を与えられた。 確認の印を押されたからである。」

と言われました。

イエス様はここで、御自身を人の子、つまり、終末的審判者であり、救済者であることを宣言しておられます。 人々はイエス様から、永遠の命に至る食べ物のために、働きなさいと言われ、それは、

『律法を守ることだ』

と受け取ったようです。 彼らは

「神の業を行うためには、何をしたらよいでしょうか。」

と尋ねました。 するとイエス様は29節で、

「**神がお遣わしになった者を信じること、それが神の業である。**」

とお答えになりました。

イエス様は御自身を信じることが、

『神の業である』

と言っておられます。 イエス様を信じる。

つまり、

『自分の生も死も、全存在を賭ける』

と言う事です。 しかし、それは生来の人間には全く出来ない事です。 イエス様の許(もと)に集まって来た人々は皆、肉の糧であるパンを求めてやって来ました。 その彼らが信じる相手は、パンを与えてくれる、今の困難を解決してくれる存在です。 彼らは自分自身が一体どんな存在なのかその事が分かっていません。

人間は神様に背き、罪に引かれたために、自分がどこから来て、何の目的で生きていて、どこへ行くのか分からなくなってしまいました。目の前の事しか見えなくなってしまい、死のかなたについて考えない事によって、逃げてしまっています。 そんな彼らが、イエス様に対して、信じるに値する存在かどうかを確かめるために

『かのモーセの様な預言者なら、モーセがマンナを与えたようにしるしを見せて欲しい。』

と要求してきたのです。

それに対して、イエス様は、

『**モーセの与えたものは、天からのパンではなかった。**』

と言われました。 なぜなら、それを、食べた人は全て死んでしまったからです。では天からのパンとはどういうことを言っているのでしょうか。

イエス様は。32 節 b で、 岩波訳では、

「**私の父があなた方に天からの本物のパンを与えつつある。**(つまり、イエス様をお与えになっている。)」

と言われました。

イエス様は、人類を永遠の滅びから救い、神様との関係を回復させる、**人の魂を生かす命のパンとして、神の子の位を捨てて人の世に降って来られました。** 神様は今や、イエス様を人間の存在を、死を越えて真に生かす事の出来るお方として、その働きを始めさせられたのです。

そこでイエス様は33節で、

「**神のパンは天から降って来て、世に命を与えるものである。**」

と言われました。 しかし、それを聞いた人々の心は、イエス様の真意を理解することなく、

34節で、

「**主よ、そのパンをいつもわたしたちにください。**」

と懇願しました。 そこでイエス様は35節で、

「**私が命のパンである。 わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渇くことがない。**」

と、人間の魂について語られました。 しかし、人々にとってイエス様のこの言葉は、全く理解困難なものでした。

私が命のパンであると言われたばかりか、

38節では、

「**わたしが天から降って来たのは、自分の意志を行うためではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行うためである。**」

と言われたのです。 イエス様の言葉は、律法を人間の考えで硬直化させた人々にとっては、とても危険な考え方に受け取られました。

41節を見ますと、

「**ユダヤ人達は、イエスが**

『わたしは天から降って来たパンである。』と言われたので、イエスのことでつぶやき始め、こう言った。

『これはヨセフの息子のイエスではないか。我々はその父も母も知っている。 どうして今、わたしは天から降って来たなどと言うのか。』」

といらだちさえ覚えてイエス様を非難しています。

人間の常識で考えるならば、イエス様は幼児から子ども時代、青年から壮年へと村人の中で成長し、生活してこられたのですから、イエス様の事を知っている人達が沢山いました。

ユダヤ人の呟(つぶやき)はもっともな事です。イエス様を信じることの難しさがそこにあります。彼らの呟きは、イエス様の耳に入りました。 イエス様は43節で、

「つぶやき合うのはやめなさい。 わたしをお遣わしになった父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしのもとへ来ることはできない。 わたしはその人を終わりの日に復活させる。」

とお答えになりました。

呟きの言葉で思い出しますのは、モーセに率いられ、40年の間、荒れ野を放浪したイスラエルの民のことです。 彼らは自分の意に添わないと、直ぐに呟きました。 民数記は呟きの書と言われるくらい、彼らの呟きが記されています。彼らは何故呟いてばかりいたのでしょうか。それは、彼らが、最善を成し、守り導き、約束を果たされる神様を、信じなかったからです。呟きは神様を、イエス様を信じない所から出て来る事を、私たちもよくよく心しなければなりません。

彼らには神様に対して、イエス様に対して、信仰が無かったと言うことです。 彼らはモーセを誇りとしていましたが、それは人間的な誇りであって、その結果、自分たちの考えに立ってイエス様を計っていました。

申命記18章15節には、

「あなたの神、主はあなたの中から、あなたの同胞の中から、わたしのような預言者を立てられる。 あなたたちは彼に聞き従わねばならない。」

と命じられています。 あの五千人の給食の奇跡によってパンを食べ、モーセが預言した、かの預言者だと確信したなら、イエス様の言葉を信じるべきです。 また、モーセは、申命記8章3節で、

「主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖も味わったことのないマナを食べさせられた。 人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった。」

と言っているのです。

五千人の給食以上に、その方の言葉に聞く事を命じています。 弟子たちと群衆の違い、それは、弟子たちは、ペトロが

「お言葉ですから、網を降ろしてみましょう」

と言って、イエス様の言葉に従ったように、御言葉を信じて従ったところにあります。 従った事に依って奇跡は起こりました。 信じるとは、神様の言葉、イエス様の言葉を信じて、それに賭けて従う事です。 しかし、何故、そのように、**信じる者と信じない者**が起こるのでしょうか。

「父が引き寄せて下さらなければ」

とイエス様は言っておられます。 神様に依怙贔屓(えこひいき)があるというのでしょうか。 いいえ、神様は全ての人をイエス様に引き寄せて下さっています。 神様の**御心**は、全ての人々が**救われ**て、**真理を知る**ようになる事です。 しかし、神様が、どんなにイエス様に会う機会を与え、引き寄せて下さっていても、**自分を正しいとする檻**(おり)から、**出ようとしなければ**、イエス様の**許へ行く事は出来ません**。

イエス様はやがて、人類の罪をその身に負って十字架に架かり血を流し、人類の罪を贖い、3日目に復活されるのです。 イエス様はその神の子の力に依って、御自身を信じ従ってきた人々を、終わりの日に復活させて下さるのです。これがイエス様の約束です。

イスラエルの民は、幼い時から、律法と預言書を学んで、知識は得ていましたが、御言葉をどれだけ信じていたでしょうか。 真の意味で、

神様の御心を求め、学んだなら、イエス様の許に行く筈(はず)です。 しかし、彼らは神様の真理を求めようとはしませんでした。 そこで、イエス様は、46節で、

「**父を見た者は一人もいない。 神のもとから来た者だけが父を見たのである。**」

と御自身の存在を明らかにされました。

だれも、人間の側から人間の力で、聖く正しい神様の許に行く事は出来ません。 ですから、神様を見た人は誰もいません。 神様の真の御心は、罪在る人間には全く分からないのです。人間は自分が神様に背いて滅びに向かっている事も分からないのです。 そんな人間を神様は尚も愛し、御子を人と同じ肉の姿でこの世に送り、その肉体をもって、人類の罪を償わせ、罪を贖って救いの道を開き、**御子を信じる者を受け入れ、永遠の神の国へ迎え入れ**て下さるのです。

イエス様はこの神様の御心を成し遂げるために、天から人の世に降って来られました。
そして、イエス様は、47節で、

「**はっきり言って置く、信じる者は永遠の命を得ている。**」

と言われました。 イ**エス様を信じる信仰**は**死で断絶するものではなく、永遠に保証される**ものなのです。

イエス様は人間の考えで、御自身を計る人々に、49節から、

「**あなたたちの先祖は、荒れ野でマンナを食べたが、死んでしまった。 しかし、これは、天から降って来たパンであり、これを食べる者は死なない。 わたしは、天から降って来た生きたパンである。 このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。 わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである。**」

と言われました。

イエス・キリストを**パンとして食べる**ことによってのみ、人は**永遠に生きることができる**のです。
イエス・キリストを**パンとして食べると言う事**は、イエス・キリストの**十字架による、神の救い**を**信じ**て、キリストに**聞き従い**、自分の**全存在を委ねて生きる**と言うことです。

イエス様は御自分の命を十字架に架けてまで、御自身を信じる者に、永遠の命を与える保証とされました。 このお方を信じないで、何処に永遠の救いがあるでしょうか。 私たちも、イエス・キリストを信じる事を永遠の命の糧、パンとして、愈々深くイエス・キリストを信じて、慕い、聞き従い、生も死も、**全存在を委ねて**参りましょう。

お祈りを致します。
憐れみ深い天の父なる神様
御自身に背き、永遠の滅びに向かっていた
私たちを、イエス様の御救いに
引き寄せて下さり、イエス様を信じさせて
下さり、有難うございます。

しかし、直ぐに人間的な考えが襲って来ます。
イエス様を見上げ、イエス様に全信頼し、
イエス様を永遠の命の糧、パンとして、
御国を目指して生きる者として下さい。

救い主イエス・キリストの
お名前によってお祈りを致します。
アーメン。